

令和7年度 こども家庭庁

「はじめの100か月の育ちビジョン」地域コーディネーター養成事業

愛媛 事例報告書



株式会社
ELPATIO Co., Ltd

エルパティオ

2026年3月31日

目次

会社概要	P 3
取組目的	P 4
地域コーディネーターについて	P 5
取組事例	
①愛媛独自講座	P 7
②はじめての一步カフェ	P 12
③多世代交流イベント	P 13
地域コーディネーター交流会	P 15
制作物など	P 16
事業の成果	P 18
今後の課題	P 19



会社概要

本社：愛媛県松山市北土居3-2-25

設立：2011年（創業：2007年）

代表：川崎暁子

社員数：38名（うち正社員5名）

事業内容：保育事業、産後ケア事業、アカデミー事業、
コミュニティ運営事業、フェムケア事業

妊活→産前産後→子育て→働く→自己実現まで一気通貫でサポートさせていただいています



妊娠・出産・子育て経験が事業の原点
創業当時の理念は「ママがHAPPYならあかちゃんもHAPPY」



取組目的

本事業では、これまで支援の「受け手」となりがちであった母親や地域住民が、地域の「担い手」へと変容できるよう、研修や実践機会を通じたネットワーク形成を重視した。

①意識変革と学びの提供

全体研修や独自講座を通じ、地域課題やこどもの育ちに関する理解を深化させた。

②社会資源の可視化と連携

行政担当者や地域団体関係者を講師に招き、地域の支援施策やまちづくりの取組を学ぶことで、社会資源をつなぐ視点を養った。

③実践を通じた経験値の蓄積

子育てサロンや地域交流イベントを企画・運営し、実際に地域住民とつながる活動を展開した。

これらの取組を通して、地域コーディネーター候補者同士のネットワーク形成や、多世代交流を含む地域連携の機会を創出し、「こどもまんなか」の理念を地域の日常の中で共有しながら、地域全体で子育て家庭を支える仕組みづくりにつなげることを目指した。

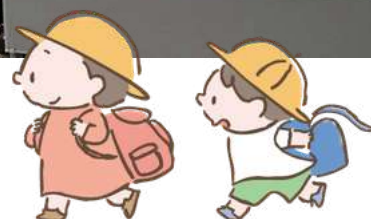


地域コーディネーター について



地域コーディネーターのメンバー構成

- 地域で母親と赤ちゃんが安心して集えるレッスンやワークショップを運営している方
 - 産後ケアの場をつくり、母親の回復とつながりを支えている方
 - 自然保育や少人数保育を実践し、育ちの土台を支えている方
 - まちづくりや地域活動に関わり、世代を超えた関係を育てている方
 - 療育が必要な子どもと家庭に寄り添い、支援につないでいる方
 - 病気のこどものきょうだい児を支え、家庭全体を見ている方
 - 教育に携わり、こどもの学びと育ちを長期的に見守っている方
- など



取組事例

地域の中で子育て家庭と支援資源をつなぐ立場として、「地域コーディネーター」を育成し、当事者・地域住民・専門職が連携しながら、日常の中で子育て家庭を支える仕組みを継続的に創ることを目的に実施した。

①愛媛独自講座(全5回・1回90分～120分)

単なる座学ではなく、行政施策からまちづくりまで、社会資源をつなぐ視点をはぐくむ目的で企画した。多世代・多分野の地域のキーパーソンを巻き込むカリキュラムとなるよう実施した。

第一回：地域を知る（松山市こども家庭部こどもえがお課 主査 遠富氏）

第二回：こどもの発達と多様性を知る（認定NPO法人ラ・ファミリエ 理事 西氏）

第三回：SNS発信の本質を知る（デザインコーチ 石堀氏）

第四回：まちづくりの現状を知る

（三津浜公民館 館長 門田氏 / 松山市坂の上の雲まちづくり部まちづくり推進課 石田氏）

第五回：フィールドワーク（Co-earth 代表 松本氏）



②はじめの一步カフェ(全4回)

研修での学びを実践へ

地域の日常の中に「つながり」を体感・創出した

③多世代交流イベント（全2回）

・大学生交流イベント

学生と子育て家庭との交流

次世代と「はじめの100か月の育ちビジョン」を共有・体感した

・高齢者交流イベント

高齢者と子育て家庭との交流

地域で長く暮らす高齢者と「はじめの100か月の育ちビジョン」を共有・体感した

④地域コーディネーター交流会(全2回)

・地域コーディネーター交流会

・地域コーディネーター活動振り返り会

地域コーディネーター同士のつながりやネットワーク構築のきっかけになった

第一回 地域を知る

日時：2025年11月7日(金) 10:00～11:30

松山市こども家庭部こどもえがお課 遠富氏

①愛媛独自講座

- ① 私たちが暮らす地域の課題を知る
- ② 妊娠期から子どもが高校生になるまでの松山市の支援・取り組みを知る
- ③ 保護者の本当に欲しい支援と行政の支援のギャップと隙間をうめる

リアル参加：19名



<地域コーディネーターの声>

松山市の取り組みを細かく知る機会となり、とても学びになりました。行政の施策やどんな組織でどこと連携しているのか、今、やろうとしている課や部署が明確化されていて、とても分かりやすかったです。

行政でも、こどもまんなか社会のためにたくさんの取り組みをしてくださっていることに改めて気づくことができた。でも、そのすべてを理解してフル活用できているかとなるとまだまだ知らない人たちもいると思うので、そういう人たちとの架け橋になれたらいいと思う。

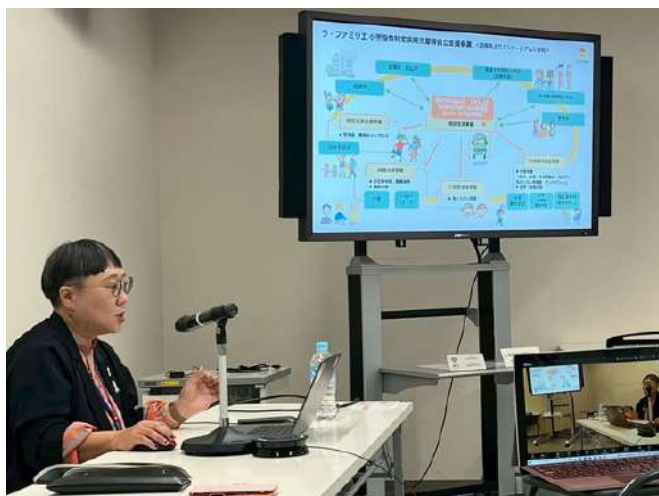
行政が行う事業や政策、民間の有資格者が提供しているサービスをコーディネーターが情報として取りまとめて、地域の住民の皆さんに届ける橋渡しのような存在になれたらいいと思う。そういった情報を集約できるプラットフォームがあれば（作れば）、と思った。

第二回 こどもの発達と多様性を知る 日時：2025年11月18日(火) 10:00～12:00 認定NPO法人ラ・ファミリエ 理事 西氏

①愛媛独自講座

- ①療育の現場からみた子育て支援ならびに家族支援について知る
- ②多様なサポートが必要であると気づく
- ③地域コーディネーターとして大切にしたい考え方、捉え方について学ぶ

リアル参加：19名



<地域コーディネーターの声>

療育などの特別支援は、「特別なもの」という感覚だったが、困りを減らす支援ではなく、子どもが輝くため／発達を促し自立を促す／苦手を克服、得意を伸ばす支援だという西先生のお話を聞き、特別なことではなくいわゆる健常発達の子たちにも必要な、ごくごく当たり前で、私たち親が当たり前に行っている支援なのではないかと感じた。地域コーディネーターとしての役割について、たくさんの気づきをいただいた講座でした。

支援とは一緒に考えて一緒に生きるということ、という言葉がとても響きました。同意や助言ではなく共感と受容が大切。これは人と人が一緒に生きていく上で何よりも大切なことだと思いました。ともこさんの懐の深さに感動しました。

こどもの安心の循環をつくるには地域のつながり、ちょっとした気づき、困っていることに対する小さなおせっかい、小さな輪でも自分の関わりの中での関係性の構築の必要性を話しあうことができました。

第三回 SNS発信の本質を知る

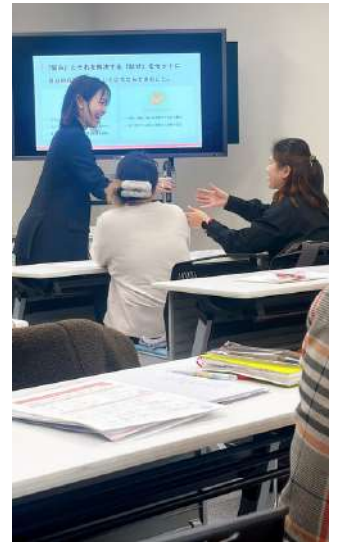
日時：2026年1月16日(金) 10:00～11:30

デザインコーチ 石堀氏

① 愛媛独自講座

- ① 「はじめの100か月の育ちビジョン」を広めていくためのSNS発信、及びリアルなコミュニケーションによる伝え方のスキルを身につける
- ② SNS発信の本質を知る

リアル参加：16名



＜地域コーディネーターの声＞

SNSだけではなく、普段から何かを伝えたいときのコツのようなものを教えていただいた気がします。感情を動かす具体的なイメージを出す、という言葉がとても響きました。

本当に伝えたいことが伝わる発信は感情が動くこと。常々意識はしているがまだまだ足りないなと思った。今回のセミナー自体が、発信とはこういうもの！というのを体現していてとても参考になりました。

「経験」こそが宝で、頭で考えたことよりも、そこでうまれた感情を軸にする。伝えたい事実が同じでも、経験・価値観が違うから、伝え方は変わるし、だからこそ伝わる人も変わるんだろうなぁと改めて気付きました。

誰に届けたいのか明確にすることは発信以外のところでもめちゃくちゃ大切だと改めて感じた。

第四回 まちづくりの現状を知る

日時：2026年1月30日(金) 10:00～11:30

三津浜公民館 館長 門田氏

松山市坂の上の雲まちづくり部まちづくり推進課 石田氏

① 愛媛独自講座

① 私たちが暮らす地域の課題を知る

② まちづくりの現場から地域コーディネーターとしてどう行動するかを見出す

リアル参加：11名



＜地域コーディネーターの声＞

公民館や民生委員、社会福祉協議会など、多様な組織が連携し子どもから高齢者まで、個人の日々の生活、地域の暮らしを支えていることを改めて認識できたお話でした。その活動の中で、プレコンや食育のことまで、こういった組織が支援をしていることを初めて知りました。

家族を超えた地域の人たちとののかかわりを継続的にしていける環境が大切だと改めて感じた。いまは若い世代の町内行事の出席率も悪くなっているのも、もっと積極的に参加してもらえ環境をつくるためにも、普段からの近所の人との付き合いや、挨拶をかわすなどから、始めていけるようになればいいなと思う。

『自分の役割が果たせているか』を考えながらお話を聞かせていただきました。自分の住んでいる地域との違いや課題、取り組み方で子どもたちの未来が変わってくる。大人の影響力の大きさを感じました。

公民館の役割が、多世代にわたり、包括的なことを担っていることがよくわかりました。高齢者の居場所としても、乳幼児、学童期の子たちの居場所としても、中間年層として、そこに関わっていく必要があるなと感じました。

第五回 フィールドワーク Co-earth代表 松本氏

①愛媛独自講座

- ①子どもたちとの「遊び」を体験することで、子どもとの関わりについて体感する
- ②地域コーディネーターとして多様な子どもたちのサポートをするためのイベント企画案が出せるようになる

日時：2026年2月4日(水) 10:00～12:00(10名)
場所：松山市祝谷 森のようちえん



これぞまさに
「人を育てる」
環境だと思う。
子どもたちは大
人に見守られな
がら、安心して
ありのままの自
分を表現できて
いる。

日時：2026年2月22日(日) 10:00～13:00(6名)
場所：砥部総合運動公園キャンプ場 とべもり+（プラス）と一緒に活動させていただきました



<地域コーディネーターの声>

スタッフのみなさんの優しいまなざしに癒されました。こどもたちがのびのびと、自分のやりたいことを我慢せずに活動できる。簡単なようでなかなかできないことだと思います。自分の言動は、本当に子どもを思っている事なのか、自己満足、自分が安心したいだけではないか？と考えられる場面が多々ありました。

子供たちの考える力を十分に認めてあげる見守りがとても参考になりました。そのおかげで、自分で考え、やってみることがみんなできていて、のびのび、イキイキとしていました。まずは、私たちが笑顔で楽しむ！！それを見た子供たちを引き込んでいく！そんな保育ができればいいと思います。

②はじめの一步カフェ

『ゆるっとまるっとおしゃべり会』

日時：2026年12月23日

2027年1月15日、2月5日、3月5日

研修での学びを実践へ

地域の日常の中に「つながり」を体感・創出した



親子が安心して同じ時間と空間を過ごしなが、地域の中でゆるやかなつながりを育むことを目的として開催した。「正解を伝える場」や「指導の場」ではなく、「安心を体験する場」であることを大切に、泣き声や授乳、途中での離席も自然なこととして受け止める雰囲気づくりを行った。

地域コーディネーターが助言よりも共感を優先して関わることで、親子が“ゆるっと”“まるっと”ありのままで過ごせる場づくりを目指した。

親子8組・地域の方5人
地域コーディネーター8人参加



親子6組
地域コーディネーター4人参加



親子5組
地域コーディネーター3人参加



親子8組・地域の方1人
地域コーディネーター4人参加



子育てにおいて「うまくできているか」を問うのではなく、「ここにいるだけで大丈夫」と感じられる安心の体験を親子に届ける場として開催した。

安心して過ごせる時間の中で、保護者がわが子の姿を改めて感じたり、自身の子育てを肯定的に捉え直すきっかけとなることが期待される。また、保護者同士が自然に言葉を交わすことで、孤立しがちな子育て期において地域の中にゆるやかなつながりを感じられる場となる。地域コーディネーターや看護師が共感を軸に関わることで、親子がありのままで過ごせる地域の居場所としての役割を担う取り組みである。



③多世代交流イベント (大学生)

日時：2026年1月30日(金) 10:30～12:00
松山東雲女子大学こども科の3年生、4年生12名
子育て中のママ 11組
地域コーディネーター、大学関係者

合計53名

東雲女子大学様の全面的協力で、柔道場を無償でお借りすることができ、学生さんへの声掛けも大学側が担ってくれたことでとてもスムーズに運営することができた。副学長はじめ、大学の先生たちも一緒に参加してくださり、地域で「こどもまんなか」を繋げていくよき機会になった。



コアメンバーの松本さんが、はじめての100か月の育ちビジョンを、巻きもので分かりやすくまとめてくれました

<https://www.youtube.com/watch?v=9ep4hIXIIDY&feature=youtu.be>

根っこが育っていくこと
地域みんなの愛やサポートが必要なことを、みんなで共有・再認識しました



<参加者の声>

子育ては1人ではないこと、多くの人との関わりが子どもにとって大切だということを改めて感じることができました。

子どもの成長で、改めて大切な期間なのだと、再確認できました。
個で子育てをする世の中になってきているので、社会全体でこどもたちの育ちを応援していこうという環境作りは、心強いです。

親子と同じ目線で一緒に体を動かしたり、話を聞いたりする中で、保育は教室の中だけではなく、地域の中にあるものだと感じました

子育て中に話せたり触れ合えたりする場は、保護者にとって大きな支えになります。学生にとっても、こどもだけでなく保護者や保育士・リトミック講師との交流は貴重な学びとなりました。

③多世代交流イベント (高齢者)

日時：2026年2月9日(月) 13:00～15:00
社会福祉法人 梅本の里ご利用者30名
子育て中のママ9組 (こども10名)
地域コーディネーター、施設関係者

合計60名

多世代でのごちゃまぜ福祉を实践されている「梅本の里」さんで活動させていただくことができ、施設内の優しい雰囲気や、スタッフの皆さんの前向きな姿勢など、勉強になることがたくさんあった。今後もはじめの100カ月の育ちビジョン推進を一緒に進めていきたい。



梅本の里さんの自家製スイーツ
みんなでいただきました

<参加者の声>

素敵な機会をありがとうございました。普段高齢の方と関わる機会も少ないので、人生の先輩方に娘をかわいがっていただけたこと、優しい言葉もいただけたことがすごく嬉しかったです。また、運営の皆さんやスタッフの皆さんにも娘をたくさん抱っこしていただき、あたたかい言葉もたくさんかけていただきました。お忙しい中ありがとうございました。

高齢者の方に我が子を抱っこしてもらったり、話しかけてもらったり・・・
「おばあちゃんの知恵袋」みたいな雑談も新鮮でとても楽しかったです
たくさん笑って元気になるねえ、と言われていたのがとても印象的でした！
こういう繋がり場を、もっともっと創っていったらいいなと思いました。



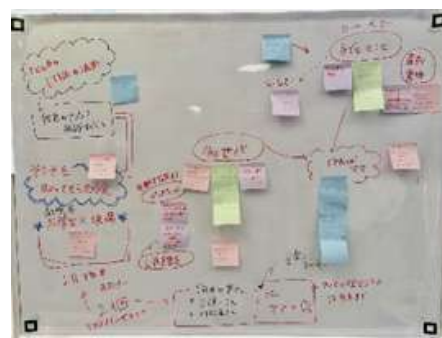
④地域コーディネーター交流会

地域コーディネーター同士の交流を深め、
個々の活動をブラッシュアップしながら
点→線→面へとつなげていく目的で開催

開催日：2025年10月27日（月） 13：30～15：00

参加者：リアル20名

- ①地域コーディネーターの顔合わせ
- ②本事業の改めての説明
- ③集合研修の感想共有
- ④今年度実施事業についての企画検討・協議（グループワーク・全体共有）



開催日：2026年3月12日（木） 12：30～14：00

参加者：リアル 15名

- ①これまでの活動の振り返り
- ②地域コーディネーターさんの労い
- ③次年度以降に繋げる課題の掘り起こし



〈これまでの活動を振り返って〉

参加者の意識や行動の変化が数多く共有された。
研修前は、自分の娘の子どもにさえどう関わればよいか分からなかったが、学びを通して子どもや保護者への理解が深まり、今では地域のママたちにも自然に声をかけられるようになったという声や、ほぼワンオペ育児で「助けて」と言いにくい風潮の中でも、地域コーディネーターの存在が増えることで、自分も助けを求めてよいと思えるようになったという変化も語られた。
さらに、普段出会うことのない多様な業種の人々とつながれたことも大きな学びとなり、地域の中で支え合う意識の広がりが感じられる会となった。



制作物

どんな言葉で届けるのかを考え、会の中で見られる保護者や子どもの様子に合わせ、その場で言葉や伝え方を調整しながら進めた。難しい内容も日常の関わりに置き換え、「あるある」と感じられる形で伝えることで共感が生まれた。また、うなずきやつぶやきに丁寧に応じることで、安心して話を聞ける雰囲気づくりにつなげていった。



親子で楽しむ
仕掛け紙芝居



〈紙芝居で伝えるはじめての育ち100ヵ月ビジョン〉



どんな機会でも、母親が安心して過ごせることと、子どもが無理なく参加できることの両立を目指し、「はじめての100か月の育ちビジョン」を分かりやすく伝える紙芝居を作成した。乳幼児期の育ちの大切さを視覚的に伝える内容とし、子どもが興味を持って関われるよう仕掛けを取り入れるなど、親子で楽しめる構成とした。また、日常の関わりを思い浮かべやすい言葉を用いることで、保護者が自分の子育てに重ねて受け取れるよう工夫した。そうすることで、子どもが自然に場に関わる中で安心した雰囲気が生まれ、母親も無理なく話に耳を傾ける姿が見られた。その結果、子どもの育ちへの理解が深まるとともに、日々の子育てを前向きに捉えるきっかけとなった。



〈巻物で伝える100ヵ月〉

子育て中の保護者に限らず、これから関わる世代や子育て経験のある世代にも伝わるよう、巻物形式で作成した。専門的な内容を日常の関わりに置き換え、誰もが自分ごととして捉えられる表現を意識した。また、巻物ならではの連続性を活かし、子どもの成長の過程を一つの流れとして実感できるストーリーで製作した。さらに、対面で広げながら共有することで自然と対話が生まれ、それぞれの経験や思いを重ね合わせながら理解が深まる時間と空気感が生まれた。あわせて、はじめての100か月は周囲の関わりが重要であることを、支える側・支えられる側双方にとって無理のない関係として伝えることで、世代や立場を越えた支え合いの意識醸成にもつながっている。

巻物で育ちを表現し ペープサートを用いて 子どもの育ちを

そっと支えるまわりの存在を表現した



制作物

①LPページ作成

コーポレートサイトの中に、「はじめの100か月の育ちビジョン」を追加しました

<https://www.aroma-elpatio.com>



はじめの100か月の育ちビジョン

こどもまんなか社会の実現に向けて

「はじめの100か月」をご存知ですか？
これは、産後の産婦から小学校入学までのおよそ1000日を指します。人生を幸せな旅程（ウェルビーイング）で送るうえで特に大切な時期とされ、こどもが健康な成長を遂げるための重要な時期とされています。子育て一環としていくビジョンとして「はじめの100か月の育ちビジョン」を掲げています。

エルパティオは、令和7年度「はじめの100か月の育ちビジョン」を定め、推進していく地域コーディネーター育成事業を推進しています。

こどもまんなか社会
はじめの100か月の育ちビジョン



リンク先から下記へ飛びます

<https://mamanoyume.net/group/17/kodomo100ehime/>



制作再委託先の株式会社マザープラス様サイト内にも公開

<https://mamanoyume.net/project>



②instagram

<https://www.instagram.com/kodomo100ehime/>

③動画

Instagram内や活動の発信用に作成
※データ別添



事業の成果



① 「支援される側」から「担い手」への意識変化

研修や実践の機会を通じて、受け身の存在ではなく、地域の中で子育て家庭を支える主体として関わる意識が醸成された。実際に、「自分の地域でも場をつくりたい」「学びを自分の活動に活かしたい」といった声が多く聞かれ、主体的な行動への一歩が生まれている。

また、行政との関わりにおいても、これまで知らなかった制度や取り組みへの理解が深まり、「地域の仕組みを知り、つなぐ存在になりたい」という意識の芽生えが見られた。

② 地域コーディネーター同士のネットワーク形成

多様な分野（産後ケア、保育、療育、地域活動等）で活動するメンバー同士がつながることで、それぞれの強みや役割を認識し合う関係性が構築された。

その結果、「このケースはあの人につながられる」「一緒にイベントをやってみたい」といった具体的な連携の動きが生まれ、点で存在していた支援が線としてつながり始めている。今後、面的な支援体制へと発展していけるよう動いていきたい。

③ 多世代を巻き込んだ「地域で育てる」実践の創出

大学生や高齢者との交流を通じて、「こどもまんなか」の理念を世代を超えて共有することで、地域全体で子どもを育てる大切さを実感した。特に高齢者との関わりにおいては、子どもを抱っこしたり声をかけたりする中で、親世代が「地域に見守られている安心感」を実感する場面が多く見られた。

一方で高齢者側からも「元気をもらった」「また関わりたい」といった声があり、支える・支えられるの双方向の関係性が生まれている。

「子育ては家庭だけでなく地域で担うもの」という意識が体感として共有された。

④ 安心を基盤とした居場所づくりの実現

「はじめの一步カフェ」では、評価やアドバイスを前提としない「共感中心の関わり」を徹底することで、母親が安心して過ごせる場を地域の中に創出した。

参加者からは「ここにいるだけでいいと思えた」「自分の子育てを肯定できた」といった声があり、孤立しがちな子育て期において心理的安全性の高い居場所として機能した。

また、参加者同士の自然な会話やつながりも生まれ、継続的な関係性の芽が育まれている。

⑤ 理念の可視化と発信力の強化

紙芝居や巻物、SNS等の制作物を通じて、「はじめの100か月の育ちビジョン」を分かりやすく伝える仕組みが整備された。実際場面では、子どもが興味を持って関わることで自然と保護者も話に耳を傾ける流れが生まれ、理念が知識ではなく体験として伝わる効果が見られた。

⑥ 持続可能な支援体制構築に向けた基盤形成

本事業を通じて、エルパティオを中心とし、コアメンバーおよび地域コーディネーターが連携しながら子育て家庭を支える仕組みづくりのきっかけが生まれた。

これまで個々に活動していた支援者同士がつながることで、役割分担や情報共有の意識が高まり、「誰がどのように関わるか」を意識した動きが見られるようになった。

また、実践や交流の中で、「単発の支援ではなく継続的に関われる体制が必要である」という共通認識が形成され、今後の組織的な運営や仕組み化に向けた土台が整いつつある。

今後の課題

本事業により一定の成果は得られたが、持続的かつ発展的な展開に向けて、以下の課題が明らかとなった。

① 継続的な活動基盤の構築

本事業を通じて、地域コーディネーターによる実践や連携の芽は生まれたものの、現状は個々の熱意や自主的な動きに依存している側面が大きい。

今後は、活動を単発で終わらせず継続的な取り組みへと発展させるため、運営体制の整備や役割分担の明確化、定期的な活動機会の設計など、仕組みとして機能する基盤づくりが求められる。

② 人材の拡充と育成の仕組み化

担い手となる地域コーディネーターは一定数育成されたが、地域全体をカバーするには十分とは言えない。

また、個々の資質や経験に依存する部分も大きく、育成内容の標準化や段階的な学びの設計が課題である。

今後は、新たな人材の発掘とともに、誰もが一定の質で関われる育成プログラムの体系化が必要である。

③ 地域資源をつなぐプラットフォームの整備

行政、民間、地域団体それぞれが有する支援情報や機能が分散しており、必要な人に必要な支援が届きにくい状況が見られる。

地域コーディネーターが「つなぐ役割」を担うためにも、情報の集約・可視化を行い、誰もがアクセスしやすいプラットフォームの整備が求められる。

あわせて、リアルな関係性とデジタルの仕組みを組み合わせた運用が必要である。

④ 地域特性に応じたアプローチの最適化

本事業を通じて、地域ごとに人のつながり方や参加意識に差があることが明らかとなった。

一律の手法ではなく、それぞれの地域特性や文化、既存の関係性を踏まえたアプローチの設計が必要である。

そのためには、現場での実践と検証を重ねながら、柔軟に展開していく力が求められる。

⑤ 「こどもまんなか」の理念のさらなる浸透

本事業に関わる参加者の中では理念の理解と共感が深まった一方で、地域全体への浸透にはまだ課題が残る。

今後は、子育て当事者だけでなく、学生・高齢者・地域住民など多様な層に向けて、日常の中で自然に理念が共有されるような発信と実践の積み重ねが必要である。

⑥ 持続的な運営を支える資金確保と仕組みづくり

今後継続的に展開していくためには、安定した財源の確保が不可欠である。

現状では、活動の多くが自主的な関わりや限られた資源に依存しており、継続性や拡張性に課題がある。是非国をあげての支援体制・事業継続化を視野にいただければと思う。あわせて、本事業で得られた知見をもとに、地域コーディネーターを軸とした子育て支援モデルを全国的に展開可能な仕組みとして整理し、国への制度的支援の提案を行うことも重要である。

具体的には、

- ・地域コーディネーターの配置および活動支援に対する継続的な財政支援
 - ・多世代交流や地域拠点づくりに対する事業化支援
 - ・地域資源をつなぐプラットフォーム整備への支援
- などである。

また右記の図のような資金循環モデルの検討も願いたい。

